
こりないキューベえ

紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こりないキユウベえ

【コード】

N1100W

【作者名】

紗奈

【あらすじ】

円環の理となったまどかからリボンを買ったほむらの、新しい世界で魔獣と戦いの日々の中にあつた出来事。

人気の無い公園。少女たちが動くには適さない暗闇の中、ぼつりぼつりとある電灯が辺りを照らしている。

照らされているベンチが一つ。

そこにはくるんつと尻尾を丸めた耳の長い生き物がベンチの前に立つ少女に話しかけていた。

話しかけていたと言うが、その生き物の口は全く動いていない。

開くことすらないその口は一定の角度を保ったまま。それはもしかしたら開くことが無い飾りなのかもしれない。

『僕と契約して魔』

彼にとってはいつも通りの勧誘のセリフ。

相手の警戒を薄めるために少しの間、行動を共にし、そしておもむろに願い事を叶えると言うのだ。行動を共にしている間に、その少女が求める願いの一つや二つをしっかりと見極めた上で。

ここ数日、彼が一緒にいたのは、ピンク色の髪の毛をボブ程度の長さで切りそろえたストレートヘアの少女。赤いビーズの飾りが付いたピンで横を止めている。

彼女の特徴をあえて述べるのならば、どこにでもいそうな女の子。基本的に、キュウベえが魔法少女に勧誘するのは、因果律が多く絡まっている、普通に過ごしていたとしてもどこか眼を惹くような魅力がある、そんな少女である。なぜなら、そういう少女には多くの未来への希望や展望が詰まっており、魔法少女へと変換する際に発生するエネルギーもまた多いためだ。

だが、この少女は全く、一つとして目立った所は無い。

魔法少女になれるだけの素質はあるにしても、こんな程度の少女に声をかける程の余裕は無い。魔法少女を増やすことに否定的な現

魔法少女たちの反感を買ってまで行く程の価値があるようには見えない。

見えないがしかし、キュウベえは見た瞬間に勧誘をしなければ！と行動を急いだ。

その理由は、見た目とは裏腹に絡んだ因果律の強さと、魔法少女になった時に生じるだろうエネルギーの試算が多かったからだ。

自分に自信の無い少女は、自分が平凡であることを心の底から理解していた。

だから、必要とすれば”契約”を確実に取れると踏んだのだ。

そして、いつものセリフを言いかけた瞬間。キュウベえの耳の真横を銃弾が掠っていった。

「……キュウベえ、アナタ何をしているの」

木の陰から銃を利き手に持ったまま現れた暁美ほむらは冷ややかな声色で言った。

ここは彼女が普段であれば寄りつくことが無い場所。暁美ほむらという魔法少女である彼女にとって、この場所は一つの記憶を刺激する場所でもある。

円環の理。

名前は胸の奥に秘めて口に出すことの無くなった彼女との、大切な思い出の場の一つ。

その場所を穢すような行いをしようとしたキュウベえへの怒りはとてつもなく大きい。

『や、やあ、ほむら。どうしてこんな場所へ……』

キュウベえにとってこの場所は、彼女がここに立ち寄らない理由は知らずとも、会うことは無いと思っていた場所。

だから、この少女との契約を進める場として選んだはずなのに……

「質問しているのは私の方だわ。答えなさい」

『ぼ、僕は新たな魔法少女の勧誘をしているだけさ！』

そう、だから僕は何も悪くない。

いくら関係が以前より良くなったとほむらが思っていたとしても、インキュベーターたちにとってエネルギーの収集は急を要する任務。少しでも多くのエネルギーを集めるためには魔法少女契約が一番良いのだから。

ちっ、と舌打ちをしたほむらが、キュウベえの首根っこを掴み持ち上げる。

「これだからインキュベーターというものは……」

油断ならないわ、とその掴む手には力が込められている。猫みたいな生き物であれば首の骨が折れて死んでしまうくらいの強さ。それに対して、キュウベえからの苦情は無い。

この程度で死ぬような柔な生き物では無いのだ。

前の時に何度かやったことがある、銃で撃ち殺す刑に処するつもりで、何も知らない少女の前から離れようとする。

黒く長い髪を翻すクールな少女の登場に視線を奪われていた少女は、キュウベえが連れて行かれる段階になってハッと我に返った。

黒髪に赤いリボンがとても似合っていて、魔法少女の姿だろう制

服がカッコイイと見つめていたのだ。

キユウベえが言っていたように、契約をすれば私も彼女のようにカッコイイ魔法少女になれるの？

「ねえ、本当に私なんかでもみんなを救えるの？ 私みたいな何もできない、取り柄も無い人間が？」

ほむらの手からぶらぶらとぶら下がったまま、キユウベえは顔を何とか少女へと向ける。そして、とても可愛らしい表情を向けた。

『ああ、君ならできるさ！ 最高の魔法少女にだってなれるよ！』

彼女の不安を一つ残らず払拭するために。

最強の魔法少女にだってなれる！ と太鼓判を押す。

その段階に至って、初めてほむらは少女へと視線を向けた。

ピンク色の髪の毛 誰かを思い出す。

おどおどとした態度 やはり似ている。

取り柄が無いと自分で言い、そして『みんなを助きたい』。

大切な彼女本人では無いものの、どれだけ被っているのか。

そして、そんな少女が契約をする！？

「そんなの、ダメ！！！」

つい、反射で声を荒げてしまう。

何度も何度も、大切な親友を守るためにやってきたこと。それを想起してしまい、少女を止めなければ！ と焦る。

「どうして、ですか？」

不思議そうに首を傾けて尋ねてくる少女。

そんな反応もまた、彼女に似て　いえ、そういう問題では無い。

「魔法少女とは、死と隣り合わせの生き物。魔法少女となった時から人間では無く、魔法少女として生きていくことしかできない、そんな未来の無い生き物にわざわざ成り下がる必要は無いわ」

時間があれば一つ一つ説明もできるだろうが、今は公園の外に発生し始めている魔獣を倒しに行かなければならないだろう。

のんびりとキュウベえを銃殺刑にしている場合では無くなったのだ。

「でも……っ！」

「　なら、そこで見ているといいわ」

公園内に魔法少女がいると感じ取ったのか、攻撃の牙をこちらへと向け始めた魔獣へと体を向ける。

この世界へと戻ってから使うようになった弓をつがえ、キュウベえは放り投げて仮面へと向けて弦を引き絞る。

次々と湧いてくる魔獣を休む間もなく一体残らず倒したのを確認して、ほむらは少女へと振り返った。

「毎夜、休む間もなく戦う日々なんて、好きこのんでする必要は無い」

平凡だと自分で言うのならば、その平穩を大切にしなさい。

「それが、今までに魔法少女となった少女全員の願いだわ」

そう、一度魔法少女となった者は二度と人間には戻れないのだから。

そして、魔獣との戦いの中負けた時だけではなく、ソウルジェムが穢れれば死ぬ。

「死ぬ時は、円環の理と魔法少女たちに呼ばれる者に導かれて遺体も残さずに消えていく」

「円環の理……消える………?」

「そう、跡形も無く消え去り、世間からは失踪したとしか思われな
い」

成長もしていくことは無いから、家族とも疎遠にならざるを得なくなるわ。

「もう一度言うわ。平穏な日常を大事にしなさい、それはかけがえの無いものなのだから」

言われたことを噛み締めるように少し下を見た少女を見て、思い留まってくれたとほむらは判断する。勧誘の言葉を再び口にしようとしていたキュウベエを押さえつけていた足をどけ、掴んだ。

再びキュウベエを回収したほむらは少女に背を向け公園から出て行きながら、二度と彼女と会わないことを祈り、親友を想う。

貴女に似た少女の一人を助けた程度じゃ償いにもならないわ
よね……

どこか遠くで、風に紛れて『そんなこと無いよ』とまどかが笑ったような気がした。

(後書き)

アニメ最終回を見た後、こんなことがあったりしたかもなあ、と少し考えてしまいました。

まど マギ、ずっと好きだー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1100w/>

こりないキュウベえ

2011年9月4日03時54分発行